# 自校教育のすゝめ
## ～鞍手高校のアイデンティティ～

二村 光哉　　古本 幹人　　宮原 壮太
安河内 陸斗　　坂本 廉　　武居 達海
指導教員　村井 哲也

1　課題

今の鞍校生は、登下校時に制帽を被っていない、校外での態度が悪い、学業や部活動の成績を見ると、お世辞にも文武両道とは言えない。しかし、鞍手高校の百周年誌などを調べると、先輩方は鞍手高校の制帽を被れることを誇りに思い、地域の方々からは「田舎の紳士」と呼ばれるほど評判が良く、学業や部活動では大変優秀な成績を収めていた。この違いは何だろうか。私たちは「鞍校生としての誇りを持っているか、否か」がこの違いを生んだ原因なのではないかと考えた。先輩方は鞍校生であることを誇りに思い、鞍手高校の名に恥じない行動をしていた。それが今ではどうだろうか。入学したのはいいものの、これといった夢や目標を持たず、なにかを成し遂げようともせず、毎日友達と会うために学校に来ている生徒がほとんどだと思われる。しかし、鞍校生の理想とする姿は「全員が学業・部活動での向上心が高く、地域の方々に応援される生徒」だと私たちは考えた。では、前述した理想の姿に近づくためにはどうすればよいのだろうか。

2　提案

私たちは話し合いの末、「鞍手高校にも自校教育を取り入れる」という案にいたった。自校教育とは、明治大学や京都大学、近畿大学など多くの有名大学で実施されている、学校が生徒に対して、学校の建学の精神や歴史、社会的な役割や行われている教育研究の内容や成果など、時効の特性や現状を伝える授業である。自校教育を取り入れることによって、学校全体の活性化を図ること、学習への積極的姿勢を育むこと、個人の生き方について考えることの３つができるようになることが期待される。私たちは自校教育を取り入れた時、生徒に伝えるべき歴史や伝統について調べた。

3　調査結果

はじめに私たちは鞍手高校の歴史や伝統行事をテーマに研究を進めた。最初は校章についてである。新制高校としてスタートした昭和２３年、校章を制定することになり、東京美術学校を卒業したばかりの美術担当教師の鵜飼毅教諭が、校門前のプラタナスをモチーフに現在の校章をデザインした。

次に、傘踊りについてである。昭和２３年、二度にわたる不審火で校舎を焼失した年、再建に向けて職員も生徒も懸命に取り組んでいたが、やはり学校全体に落胆の色は隠せなかった。そこで生徒の士気を高めるために、開催すら危ぶまれていたその年の体育祭

において、生徒・職員・ＯＢ・地域住民が心を一つにして参加できるような種目に取り組みたいということになった。広い運動場に歴史の年輪を描くように、二重三重の円を作って鞍手高校に関わる人が共に踊り、心を一つにする伝統として現在も行われている。

次に、プラタナスについてである。プラタナスは日本語で鈴懸樹といい、幅広くどっしりしていて、都会の煙や塵埃に弱らず、すくすくと茂るという特性があり、鞍校生にもそのように育って欲しいという思いが込められている、

次は勝利の翼である。応援歌である勝利の翼は昭和２７年野見山朱鳥作詞、高島貞充作曲の下、作成された。勝利の翼には格式高い歌詞を勢いよく風に乗って飛翔するイメージがこめられている。

最後に腕章である。女子の制服の左袖には四つ葉のクローバーの形をした刺繍がついている。男子の制帽の３本の白線は「真」「善」「美」の三つの言葉を象徴するものですが女子の制服にもぜひこれを取り入れたいということになった。男女共学一期生である高校四回生の女子生徒たちが校章をデザインした。美術の鵜飼教諭に相談して、自分たちで考案したのが現在の腕章だ。

これらの研究した内容をしっかりと頭に入れ、鞍手高校の歴史や伝統行事を守っていきたい。

次に鞍手高校の先輩方の功績をテーマに研究を進めた。最初に部活での功績を調べた。まず、弓道部では昭和４１年に重松信夫さんが第１７回全日本弓道選手権大会で優勝しその栄誉を讃えて授与された天皇杯がある。

次に水泳部では、今は使われなくなっているが弓道場の横に昭和３年に当時の生徒の手によってプールが作られた。水泳部はそこで活動しており数々の功績をのこしている。その中で天野富勝さんは数々の賞をのこしており、１９３８年には1500m自由形で当時の世界新記録である１８分５８秒 8 を記録し、１９３８年１９３９年１９４１年には、日本学生選手権の男子８００m自由形で３度も優勝している。

次に成績表では、鞍稜会館には成績の欄すべてに「甲」の字が記された成績表がある。「甲」とは順序を示すときに用いる文字の最上級で当時の成績表では１から 5 までを戊、丁、丙、乙、甲のように記されていた。つまりこの成績表はオール５であり出席も皆勤している。

次に鞍手高校の校歌を作詞した伊馬春部さんは当時放送作家として活躍して、ラジオドラマ「向こう三転両隣」や、日本初のテレビドラマ「夕餉前」の脚本を手掛けている。それから鞍手高校３２回卒の古野淳さんは１９８５年にヒマルチェリ南稜より初登攀し、１９９５年にはエベレスト北東稜より世界初完投した。そして、現在では古野さんは日本山岳会会長を務めている。

現在鞍稜会館にはこのような先輩方の功績の証がたくさん残されており、在校生にこれらを見せることにより勉強意欲や部活意欲の向上を図ることで鞍手高校をより良い学校にできるのではないかと考えた。私はこの研究を通して鞍手高校性であることを

誇りに思った。私たちはこの先輩方の様に文武両道に励んでいくべきである。

次に鞍手高校と第二次世界大戦をテーマに研究を進めた。まず、「戦時中の鞍手中学校」についてである。これは昭和 55 年 2 月に渡鉄身さんによって書かれた日記で、当時の空襲や戦争に向けた訓練などの様子や、当時の困窮した日常の様子が詳細に記録されており過去の鞍手中学校の様子を細かく知ることができる。

次に、眞隅勝馬さん（中学校 16 回準卒）についてだ。彼は鞍手中学校で優秀な成績を収め旧日本海軍に入隊し、海軍大尉となり伊号第 74 潜水艦の艦長として戦争に向かった。その後の昭和18年8月4日、ニューヘブリディーズ諸島近海でアメリカ軍との交戦の末、亡くなられた。最後に、「鎮魂の扉」についてである。これは戦争で亡くなられた方々の慰霊碑として平成 10 年 7 月 25 日に鞍陵会館二階に建てられた。

## 4　結論

鞍手高校は１００年以上の長い歴史を持つ伝統のある高校であり、この学校の生徒になれたこともほこるべきことである。しかしながら、今の鞍高生には「誇り高き鞍校生」としての自覚が足りないと私たちは考えた。

従って、自校教育を取り入れ、その中で私たちが調査したことのような鞍手高校にしかない行事や歴史、校章や制帽など身近なものの起源を生徒に伝えることで「誇り高き鞍校生」としての自覚を持つようになり、学業や部活の成績の向上、さらには地域の方々に愛される鞍校生になることが期待される。

そして、一部の大学では自校の在り方について学生が意見を述べたり、提言を作って討論させるなど、学校づくりへの学生の参加を促すきっかけとしている例もある。

また、効果が期待されるのは何も生徒に限ったことでは無い。自校教育を取り入れることで鞍手高校の歴史を調べる教員にとっても自校をより深く理解する機会になると私たちは考える。

今後は、今回私達が調べたことの他にも、鞍手高校校歌のもなっている石炭の層などの調査も進めていきたい。

## 5　出典

・shingaku.go.jp
・鞍手高校百周年誌